

澤山ありますが、それらは茲では省いて申しませんが、古人が幾百度今日までやつてゐるか知れぬが、どうにもならぬ珍しい「間」と人形の動きとの一挿話を茲に挿んでおきませう。

それは「千本櫻」の鮮屋の段の、梶原と權太のくだりです。梶原が「コリヤ權太」といふところで、何んとしても三味線の手がこゝで、「間」があるのです。こゝの引かゝりがどうにもつかぬので、魚の如く黙していゝ筈の權太の人形遣ひが、「何ぢや」と一言いひます。人形遣ひが辭を發するのは不都合ですが、この權太の「間」ばかりは、そのまゝでは舞臺が散りますといふのが、人形の「間」のむづかしいところ。

この「千本櫻」の書卸しは延享四年の霜月ですから、ざつと百七八十年、それでこゝの「間」がそのまゝであるが、書卸しの太夫はこの「三の切」は竹本此太夫、三味線は友次郎、權太の人形は吉田才治が遣つてゐるが、どう使つたかどう語つたか知りたいものだといふのはいつも思ふのです。

八、人形遣の修業と其専門

人形遣ひのことをざつと述べましたが、人形を三人一致して動かすこと、その事だけでも並々ならぬむづかしい藝ですから、人形遣ひばかりは中年からの修業は殆んど不可能です。太夫だと、好きから八

百屋や豆腐屋でも素人で語つてゐる。その聲がいゝ、延いては豆腐の賣り聲や、魚の晝網の威勢のいゝ賣聲がいゝといふので、玄人になつたのもあります。現に今の豊竹駒太夫は、鶏の鳴き聲や、犬の鳴き聲がうまかつたのを耳にした二代團平が、その咽喉に惚れ込んで小按摩であつたのを太夫への道に導いたのでしたが、人形ばかりはさうはいかない。幼い時からの修業です。練習です。少くとも十二三歳を過してはもうモノにならぬ。十二三歳からの猛修業を必要とします。

十二三歳から人形遣ひを志願するとして、初めは、人形遣ひの後ろにゐて、舞臺の小道具を乗せる臺——蓮臺といひます——の置所、小道具の出入れ、柝の打ち方、そして淨りりの文句の誦誦、文句につれての人形の仕草、これだけのことを、ざつと修得せねばなりません。遊び盛りの小僧が、何として自ら進んで人形遣ひにならうと志を立て、これだけの難修業を今日の人間が致しませうか、こゝ九年間一人の人形遣ひの入門のないのは尤もです。自發的に人形遣ひを志望するものが、今の時世では絶無、親が淨りりを飯より好きだといふので、子供をつい人形遣ひにしようといふ了簡が出たにしても、今の人形の立者達は、この難修業と、報はるゝところの薄いことを述べて再考を親達に勧めることにしてゐる。然らずば人間一生を可哀さうに臺なしにしてしまふと、彼等は云うてゐます。「人形遣ひの保護」はこの點で必要で、言葉を換へると、「人形遣ひの保護」でなくして、これからの「人形遣ひの養成」を必

要とすること今日より急なことはありませんまい。今日の榮三、文五郎、玉次郎の三人が百年の後は、もうその仕事さへをも教ふる人があるかないか覺束ないと思ひます。

この難修業の間が早くとも三年、次に足遣ひ、次に左遣ひと階級を踏んで、一通り人形の仕草が腹に入つてからが一人前の人形遣ひとなりますが、左遣ひのうちに、その人の向くべき方面がほど定まつてくるといふ風になります。即ち女形になるか、荒物使ひになるか、その人の腕と當人のテンペラメントがその人形の専門を自らに作ることになるのです。

で、人形遣ひの凡その種類を茲に挙げますと左の如くです。そして近世におけるその遣ひ手を、近世の代表者を以て下に示しておきませう。すると、讀者は舞臺の見當が略つくだらうかと思ひます。

荒物遣ひ……………	初代吉田玉造
ふけおやま遣ひ……………	桐竹紋十郎
ふり袖遣ひ……………	桐竹 龜松
世話娘……………	吉田 鹿造
若 者……………	吉田 玉助
おやち遣ひ……………	吉田 玉治

婆々遣ひ……………豊松東十郎

と、ざつとこれ位あります。即ち人形遣ひの種類は、とりも直さず「淨るり人物」の類型の數を示すことになる。人形淨るりは劇藝術の如く、わけて近代劇藝術の如く、個性がハッキリと出せませぬ、ある一定の類型に還元されて、個性よりは大きつばな「性根」と呼ばるゝ「魂」から形式美への藝術ですから、これ位しか類型を持たぬ。丁度昔の歌舞伎よりも、尙一層類型が縮まつてゐるといふわけです。

こゝに「若者遣ひ」の代表として擧げた玉助は初代玉助で、今日の文五郎の師匠です。又「おやぢ遣ひ」の代表とした吉田玉治は、ついこの間死んだ吉田文三——恐らく最後の「荒もの遣ひ」であつた吉田文三の師匠です。

こゝに擧げた人形遣ひは、その名の示すところによつてほとゞ讀者はどんな人形を指すかは、判りませうから説明を省いていゝのですが、一言述べておきたいのは「菊畑」の鬼一の如きは、こゝにいふ「おやぢ遣ひ」に入つてゐます。そして「荒もの遣ひ」は、「二十四孝」の横藏、「日向島」の景清などの類ひです。「日向島」を例に擧げたに因んで、こゝに述べておきますが、この淨るりは作としてはまづ／＼下らぬものともいへますが、舞臺ではなか／＼の大ものです。この「日向島」に限つて、手摺は青竹、その下約五寸の隙を存して手摺となる。そして太夫の見臺は白木です。即ち追善淨るりの由緒を持してゐる

ます。それはこの「日向島」は、正しく外題をいふと「嬢景清八島日記」であるが、今日舞臺で重く取扱はれる「日向島」の段は、花菱屋の端場を付けて三段目になつてゐますが、實は享保十年十月豊竹座で上演された西澤一風田中千柳合作の「大佛殿萬代石礎」の三段目を「嬢景清」にそのまゝにとり入れました。しかも「大佛殿」からして謠曲「景清」の翻案であります。この作の重く取扱はるゝ理由は「嬢景清」が明和元年の十月豊竹座に上演されましたのは、豊竹越前少掾の追善淨りであつたからで、この以來今日に至るまで、「日向島」の上演形式は、依然として追善の形式で、白木の見臺、青竹の手摺を用ゆるといふ遺風をなしてゐます。一面から見ると私はこれを越前少掾、即ち若太夫の大きな勢力を物語るものだと思ふ。淨りりの大成者は筑後掾の竹本義太夫でなくして、若太夫であつたことを物語つてゐます。即ち後世今日に及んで「西風」の筑後の餘韻よりは、「東風」の越前の流れが後世の淨りりを支配してゐる。この意味において、私は義太夫、近松門左衛門が傳へられ、研究されると同じ程度にもつとく若太夫と紀海音とを更らにくく深く知らねばならぬと思ふのです。

話が脱線しましたが、こんな意味で今日は「日向島」を大きな淨りりと見る。人形の方でも「景清」は「荒もの」の一方の代表でなくくの小腕では遣へません。ところで、三味線の健腕を聞き試すのは、タ、キであるが如く、人形の腕の強さを見るのは、左手を人形の背から挿込んで見物には見えませんが

人形の腹の内を拳を裏にして、あれだけの人形をグイと捧げてゐるのですから、人形の足を見せねばならぬ。ところが、練習が足らず腕が鈍いと、人形の出には左程でもありませんが、遣つてゐるうちに、人形が段々と落ちて來ます。人形の足が、手摺の上か、ま^ちを水平線として、その上にならねばならぬのが、人形がすつて來る。普斷の勾欄だとさして目だちませんが、「日向島」だと上が青竹、その下に隙がある。こゝへ景清の足がだらりとすかして見えるなどは見つともない。青竹の上に景清がああ長丁場をグイと上つて持堪へねばなりません。こればかりではないが、景清のむつかしさはまづこゝから出發します。こゝに同じ場面の二つの「日向島」の寫真を見ますと、一つは多爲藏、一つは玉藏のそれですが、演技を見なくても、寫真を見てもこの位の人形だと遣ひ手の巧拙が見えます。

そして昔は人形遣ひは大勢ゐましたから、各自専門の人形しか遣はなかつたのですが、今日ではさうは言うてゐられない。今日の吉田榮三の如きは、座頭であつて人形の凡ての責任を持たされてゐますから、何でも遣はねばならぬ。

元來は「荒もの遣ひ」でないのに、こんなわけで榮三は、近來は「荒もの」が出ると、必ず榮三が遣つてゐます。それだけにこの人の腕は近來グン／＼と上る一方です。

文五郎の方は、昔でいふと桐竹紋十郎型の人で、女形で終始して、クドキの受けるところで人氣を喫

つてゐますが、それだけに藝の範圍が狭い。そして深さも足りない。桐竹紋十郎を近世の名人だと人はいひ、又しか思つてゐる人が多いやうですが、事實は違はう。華が多くして實がなかつた。道行などに素的な形を見せましたが、名人といはれるには遠かつたらうと斷言します。

いつか上京して歌舞伎座へ諸藝大會式の催しで、人形では紋十郎が出ました時に、紋十郎の女形を揚幕で見えてゐた五代目菊五郎が、「紋十郎といふ人は大層もない名人だと聞いたが、見ると聞くとは違ふものだ。政岡の飯炊で塗盆で子役の姿を寫すしぐさがあつたが、又野崎のお光で、お染を鏡で寫し、簪でつゝく仕草をしてゐるが、これが一日の狂言だからね」といつて笑つたさうです。さすがは菊五郎の見識だ。味ふべき藝評だと私は今に思つてゐます。

そこで「人形遣ひ」の種類は前に擧げましたが、これとは別の分類で、人形そのものの種類の大略——即ち頭(カシラ)の種類、名稱と、その淨るり中の人物役名とを簡単に説明しておきませう。上に掲げたのは頭の名で下に連ねたのは用ひる扮役名であります。

「文七」——光秀、五右衛門、貞任、熊谷などがこの部の人形。

「孔明」——上品な頭で、由良之助とか菅相丞などがこれ、この頭の目は眠りますが、眉は動かぬ。

五十五六といふ上品、この眉はベラボウ眉毛といふ描眉毛で奥床しく描くのが定法。

「團七」——ならず者で、時代では宗任、世話では權太がこの頭。

「源太」——重次郎、三浦之助、八幡太郎、義經などに使ひ、眉が動きますのは、「動きの源太」の又の名があります。

「若男」——勝頼、忠兵衛。

「丸目のしゆと」——これは一等恐い顔をしてゐる頭です。「大塔宮」の太郎左衛門、「忠臣藏」の師直

「鉾屋」の梶原などがこれ。

「ふけをやまこ」——「太十」の操、「陣屋」の相模、「寺小屋」の千代。

「娘」——「菅原」の八重、「太十」の初菊、時姫、しのぶ。

「新造」——をやま傾城に遣ひます。阿古屋、夕霧、宮城野、梅ヶ枝など。

「婆々」——は一手で、アタマは代へますがカシラは一手です。人形淨るりを御覽になると婆の容貌の變りのないことに心付かれるでせう。但し怖い婆は別にあります。例へば、帶屋、一つ家、明烏の遣り手、眼の圓いのです。即ち「婆々」は二通りと解してよろしい。

かう舉げてゆくと數限りなく澤山の品目があります。一例をいふと「源太」の頭を使ふ「太十」の重次郎といふ一役でも、手負ひになつて頭が散バラになつてからのカシラ、兜下の頭、社衾、それで動きの

(肩の)あるのとないのとを使い分けるのですから、重次郎でも數種のカシラを要します。「おやち」のカシラでも、白太夫、定之進、孫右衛門、與一兵衛とあるわけです。

申しおくれたが、人形の方では顔といはうか——首といはうかを「カシラ」といひ、「アタマ」といふのは髪です。歌舞伎の鬘にあたるのを「アタマ」といつて區別してゐます。

それで、前に述べた「景清」ばかりは全く別で、「景清」といふ人形のカシラが、只一つ景清に使ふためにあります。斯く人形では、「景清」ばかりが特種の取扱ひを受けてゐるのです。で、一興行のカシラの数(が)ざつと六七十位を要し、大茶櫃に三杯はありませう。狂言としては「忠臣藏」の通しが一番多くカシラを要します。

で、人形遣ひの左腕は、前にも申したやうにグツと人形を差上げてゐるとともに、中指と人差指(食指)の二本で、この二本の指の廻はしでカシラが極るのですから、どうしても子供のうちから、この道に入つてゐないとダメです。そして八つ九つが一等よく、十二三歳を止まりとしますが、これが前にもいつたやうに、淨るり文句、手順、小道具を覚える、柝つをうつ、幕の柝つ、人形遣ひの履きもの——五番の履きものを、時に應じて人形遣ひに與へることから、蔭うちをしたり、横幕を引くといふ風で、この人形遣ひの雛が巢立つまで順序に育つて九年。十歳から入門して十九か廿歳になつて、人形を持たして

みると藝の善悪はもうはつきりと判ります。

人には癖のあるもので、この人形遣ひにも癖があつて、何としても人形の頭が歪む人があります。こんな弟子はもうどうしても直りませぬ。九年十年の修業が、これ一つで全くの徒勞に終るのです。

今とは違ひますが、この人形修業時代が一夜二錢の日給といふのがいゝ方で、十五六日立で六十錢です。これなどがさう遠くない頃の話だから嘘のやうな話です。これも今日では時效にかゝつてゐますから申述べていゝでせうが、近松座が潰れて、こゝの人氣もののこの間死んだ吉田玉藏と、今の吉田文五郎が御鑿の文樂座へ買はれた時に給料が三十圓でしたといふ話。淨るりは一芝居十五日立てになつてゐますから、十五日三十圓の勘定。これがさう遠い昔の事でない。文樂座を松竹合名會社が買収して、第一回興行が明治四十二年四月八日初日であつて、攝津大掾が引退して、三世越路太夫が、紋下の位置になつた時が、玉藏と文五郎とが文樂座に入座した時でした。即ちこれが大正四年二月十日が初日として、翌くる三月二十日初日の興行に「千本櫻」が出て、この道行に、玉藏が忠信を、文五郎が靜を遣つたのが、この兩人の仕打に認められる初めであり、文樂座における位置の確立の時でした。

九、人形の構へといふ事